

シネマ探訪

大黒屋光太夫ゆかりの地を訪ねて 田中忍 三重フェス会長

映画『おろしや国酔夢譚』（監督：佐藤純弥、1992年）は、日本とロシアの外交を切り開ききつかけとなった鈴鹿市の偉人・大黒屋光太夫らの生きざまを描いたものである。1782年、紀州藩の廻米などを積み、江戸へ向かった光太夫を船頭とする「神昌丸」は嵐に出会い、漂流しロシアへ流れ着く。光太夫は女帝エカテリーナⅡ世に謁見し帰国の許可をもらい、根室に到着したところまでが描かれている。

光太夫らは、帰国後、日本が鎖国中であったことなどから、「ロシアで見聞きしたことは、話してはいけない」と江戸で軟禁状態に置かれた。鈴鹿の土地を二度と踏めないだろうと諦めていた光太夫に、一時帰省の許可が出た。鈴鹿に戻ったのは、1802年4月22日である。漂流してから約20年ぶりの里帰りであった。この新事実がわかったのは1986年である。鈴鹿市若松のある倉庫から光太夫の書いた「帰郷文書」が発見されたのだ。この映画の原作となった井上靖の同名小説は1967年の作品であったので、光太夫が鈴鹿に

戻ったという事実を原作執筆時には井上靖もわかっておらず、小説にも反映されなかったわけである。

本作を観た後、光太夫という人物を知りたくて、三重フェス委員会の杉順委員に資料を借り、ゆかりの場所を案内してもらった。

まず、鈴鹿市若松にある大黒屋光太夫記念館を訪ねた。上記の1986年の事実は、同館の資料でわかった。また、蘭学者・桂川甫周（かつらがわほしゅう）が帰国した光太夫から丹念にロシアのことを聞き取り編さんした「北槎聞略」（ほくさぶんりやく）をはじめ、ロシア文字墨書（光太夫著）、光太夫がロシアで使っていた食器や「神昌丸」の模型等も展示されていた。さらに、謁見するシーンで、光太夫を演じた緒形拳、エカテリーナⅡ世を演じたマリナ・ヴラディイラが着用した衣装が4点展示されていた。資料によると、この衣装は鈴鹿市所蔵のものとのこと。本作は、鈴鹿市ゆかりの映画であるにも関わらず鈴鹿市でのロケがされておらず残念に思っていたので、映画製作会社から衣装の寄贈を受けていたことを知り本作と鈴鹿市の結びつきが改めて強く感じられ、嬉しくなった。

ところで、光太夫関連の記念碑は2か所にあるとのこと。

まず1つは、地元、白子港緑地公園にある記念碑である。光太夫らが漂流をした船が出港した場所に立っており、白子新港を緑地公園と整備する際に作られた井上靖直筆の文学碑と、郷土の彫刻家・三村力氏の力作によるモニュメントだ。除幕式は1992年4月に行われた。この年は6月に映画公開があり、鈴鹿市市制50周年でもあった年である。井上靖は1991年1月に他界。この直筆は1990年に書かれたもので、おそらく絶筆ではないかと思われる。井上靖はこの碑を見ることがなく、当日の除幕式には奥様が臨席されたとの事である。

もうひとつの記念碑は、イルクーツク市に建設された露日交流の記念碑である。露日交流の歴史の1ページに偉大な足跡を残した光太夫と彼の同胞らを讃え、イルクーツク市と鈴鹿市の友好の証として、1994年11月、イルクーツク市に記念碑が建立された。鈴鹿市からも式典に参加をしている。近年、鈴鹿市では、大黒屋光太夫の顕彰と市の偉人としてのアピールや街おこしが盛んだ。鈴鹿市にある洋菓子・和菓子・ホテルなど異業種が加盟し、「光太夫ネットワーク」を結成。種々のイベント開催と光太夫ブランド品を販売するなどの活動を続けている。また白子高校が創作ミュージカル

「鈴鹿の偉人 大黒屋光太夫」を開催、多くの来場者が訪れている。

またネット（日東紅茶のホームページ）では、つぎのような理由で11月1日を紅茶の日とし、光太夫の名が見つけれ

れる。「紅茶の日」は1983年（昭和58年）、日本紅茶協会によって定められた。その由来は、（映画では描かれていないが）エカテリーナⅡ世への謁見から帰国までの間、光太夫はロシア皇太子や貴族、政府高官から大変優遇され、様々な招待を受け、当時のロシア文化、社会を体験した。また、エカテリーナⅡ世の文化的事業に協力するなど、大きな足跡を残したため、サンクトペテルブルクを離れる直前の1791年11月1日、光太夫はエカテリーナⅡ世のお茶会に招かれ、日本人として初めて、本格的な欧風紅茶（ティー・ウイズ・ミルク）を楽しんだと言われている。

光太夫は1828年78歳で病死した。没後約190年経っても名を残す光太夫の偉大さを知り、改めて鈴鹿市で映画『おろしや国酔夢譚』が上映されることを望みたい。